

第46回（2025年度）

わたしからの人权メッセージ  
特選作品集

堺市人权教育推进协议会



第46回（2025年度）

わたしからの人权メッセージ

特選作品集

# 「わたしからの人権メッセージ」発刊にあたって

堺市人権教育推進協議会では、人権を守り、平和で差別のない明るい都市をめざして、市民主体の活動を進めています。その一つが、本年度で第四十六回を迎える「わたしからの人権メッセージ」です。多くの市民の皆様が日常生活の中にある人権問題に関心を持ち、自らの視点で考え綴ることによって人権についての認識と理解を深め、さらに作品の共有を通して広く人権啓発につなげることを目的として実施しています。

今年度も、私たちの呼びかけに幅広い年齢層の皆様から、数多くのメッセージを寄せていただきました。作品を応募していただきました皆様に心からお礼を申し上げます。厳正なる審査の結果、優秀な作品を特選作品とし、ここに、「わたしからの人権メッセージ」特選作品集として発刊します。

人権が尊重され、安心して暮らすことのできる平和で差別のない社会を実現することは私たちにとって共通の願いです。しかしながら、人権を取り巻く状況を鑑みますと、インターネットやSNSを通じた他者への誹謗中傷や差別的な書き込み、障がいのある方への不当な差別、女性や子どもへの暴力、外国にルーツを持つ方や性的マイノリティ

の方への偏見など、人間の尊厳を侵害する事象は後を絶ちません。また、世界では、多くの人々の尊い命が戦争や民族紛争等により失われています。

そのような中、堺市では市政運営の大方針である「堺市基本計画二〇二五」において、「すべての施策を平和と人権を尊重する視点をもつて進める」と示した上で、令和4年度から5年間を取組期間とする「第3期堺市人権施策推進計画」を策定し、人権が尊重される社会の実現に向けた取組を総合的に推進しています。

本協議会におきましても、市と連携し、人権意識の向上と確立に向けた啓発活動をさらに進めたいと考えています。

最後に、本冊子が、一人でも多くの方々に親しまれ、身近な人権問題について考える契機となり、私たちのまち堺から、人権文化の花を咲かせる一助になることを期待しています。

二〇二五年十二月

堺市人権教育推進協議会

会長　　金澤正巳

## もくじ

- 小児がんと戦うお友達へ ..... .
- 「墓はいらない」 ..... .
- 「伝えたい」がくれた宝物 ..... .
- 本当の強さ ..... .
- 男、女の前に、わたし、あなた ..... .
- 明日、笑つて過ごすために。 ..... .
- 大切なときに大事なこと ..... .
- ありのままの好きに胸を張つて ..... .
- 知は力なり ..... .

- 『介護の現実とすれ違う家族』・・・・・
- 『人類は助け合い』・・・・・
- 言葉の重みについて・・・・・
- インターネットといじめの関係・・・・・
- 「あたたかいね」・・・・・
- ウクライナ情勢から考える平和と人権・・・・・
- 違つても、同じ・・・・・
- 『女性だから』の一言が残した傷・・・・・
- 高齢者の人権を守る・・・・・

※御本人の許諾の得られたものを掲載しております。

# 小児がんと戦うお友達へ

小学校五年

上島柚月  
うえしま ゆづき

私はこの春、長く伸ばしていた髪の毛を切りました。理由は、暑くなる前にさっぱりするためでした。すごく長かつたので母から「ヘアドネーションにしてみたら?」と勧められました。「ヘアドネーションって何?」と聞くと母は「病気や事故で髪の毛を失つた人が使える医療用のかつらを作るために、切つた髪の毛を寄付すること」と教えてくれました。白血病やがんになつてしまつた人の多くは抗がん剤治療を受けるけれど、その副作用で髪の毛が抜けてしまうから、特にがん患者さんのために役立てられるそうです。私はその話の中で「小児がん」という言葉を初めて知りました。小児がんは十五歳までの小児がなるがんのことと、白血病や脳にできるがんなどがあるらしいです。がんという病気は何となく大人がなる病気だと思っていたので、私と同じくらいのお友達や産まれたばかりの赤ちゃんでもなる病気なんだと知つて驚きました。小児がんの患者用のウィッグに必要な子供の髪の毛がなかなか集まらないと聞いたので、自分の髪の毛が役立つならと喜んで寄付することにしました。でも……

病気や事故で髪の毛を失つた人がウィッグを使うのはどうしてだろう?もちろんその本人が使いたいから使うなら良いと思う。でも「他人の目」を気にして使うのなら、

悲しい社会だと思ってしまう。「髪の毛が無いとじろじろ見られるから」「みんなと違うといじめられるから」「病気のことを興味本位であれこれ聞かれるのが嫌だから」そんな気持ちでウィッグを使っているのだとしたら、ただでさえ辛い病気との戦いをしているのに周囲の目とも戦わないといけないのなら、変えないといけないのはがん患者さんの姿ではなく、見た目にこだわる社会だと思います。

私は二年生の時、生まれつきの心臓病を治すために開胸手術を受けました。手術を受けた後、しばらくは学校に行つてもみんなと同じ活動は出来なかつたし、胸の骨が引つ付くまではランドセルを背負うことも出来ませんでした。ほんどの人が親切で優しく助けてくれましたが、中には嫌なことを言つてくる人もいました。胸にある大きな傷跡を「着ぐるみのチャック」とからかわれたこともあります。悲しくて恥ずかしくて泣いてしまった私に母が言いました。「柚月は大人でも耐えられないほどの恐怖を乗りこえて手術を受けたんよ。そして病気に勝つた。その傷跡は病気に勝つた勳章やから自信を持ちなさい。」と。それを聞いてから私は強くなりました。これからも嫌なことがあるかもしれません、私は絶対負けません。だから私の髪の毛からできたウィッグを使う小児がんのお友達にも頑張って欲しい。まずは病気に勝つて、そして他人の目を気にしてではなく、自分自身の意思で、自分がしたいおしゃれのためにウィッグを役立ててもらえたなら嬉しいです。

# ひいおばあちゃんが体験した戦争の話

小学校五年

丸 谷 岳 瞳

まる

たに

たけ

ちか

今年は終戦から80年。戦争を体験した方々が高齢になり、次世代へ語りつぐのが難しくなってきたときいた。ぼくには97才のひいおばあちゃんがいる。ひいおばあちゃんが堺で体験した戦争中の話をきいて、ぼくがまとめてみるとこととした。

太平洋戦争が始まった時、ひいおばあちゃんは14才で、お母さんとお兄さんの3人家族だった。お母さんは大阪のこう置所で働いていた。戦争がだんだん激しくなると、堺に帰れなくなつて職場に泊まり込むようになつた。しばらく経つとお兄さんが、兵隊として戦争に行くことになつた。ひいおばあちゃんは、「帰ってきてな」とお兄さんの手を強くにぎつた。お兄さんは黙つて何度もうなづいた。

お兄さんを見送つた後、ひいおばあちゃんは、泣いて泣いて泣いた。そして、その日から一人でくらすことになつた。お兄さんが無事に帰つてくるよう、毎日、方違神社にお参りに行つた。

食べる物が少なくなり、畑で育てたサツマイモが夜に盗まれる事がよく起きた。食べ物が無くなることもいやだけど、1人で過ごす夜がもつといやだつた。明かりがもれると、爆撃機にねらわれる所以真っ暗の中で夜を過ごした。お母さんから預かつた通帳を

お腹にまき、空しゅう警報がいつ鳴るかも分からないので、怖くてよく眠れなかつた。堺の上空にも爆撃機が来た。頭上を低く飛ぶ爆撃機がおそろしかつた。焼い弾が落ちるところ音がひびき、その後煙が立ち上つた。「私はいつ死ぬんかなあ」と思いながら過ごしていた。

爆撃機は防空ごうめがけて焼い弾を落としたので、防空ごうの中の全員が死ぬこともあつた。ひいおばあちゃんは大空しゅうの日、堺の刑務所に逃げた。刑務所にも爆弾が落ちたけど、何とか消し止められた。

戦争が終わつたと知つた時、ひいおばあちゃんは「良かった」と心の中で思つた。それからしばらくして、お兄さんがとてもやせていたけど無事に帰つてきた。ひいおばあちゃんは、とてもうれしくて、夜遅かつたけど、方違神社に走つてお礼を言いにいつた。  
「戦争はおそろしいよ。」

ひいおばあちゃんは、目に涙をにじませて話してくれた。ぼくは昔の話と思えなくなつた。戦争の経験がない人には、戦争には大きなきせいを伴うことを知つてほしい。知つていても戦争をしようとするなら、よほど追いつめられた事情をかかえているのだと、ぼくは思う。ぼくには知らない人にも話しかけるゆう気がある。事情をきいたり、一緒に話し合つたりしてみたい。

# 「墓はいらない」

中学校一年

井上晴登 いのうえ はると

私の曾祖父は、太平洋戦争で徴兵され、「インパール作戦」という最も過酷といわれた戦地へ送られました。食料も武器も届かない中、多くの人が命を落としましたが、曾祖父は奇跡的に生きて帰つてきました。

戦後、曾祖父は戦地でのことを多くは語らず、ただ「戦友たちの屍を道すがらに置いてきた。」と、静かに語つていたそうです。次々と倒れていく仲間を見捨てながらも、命令に従い、自らも死と隣り合わせの中で前へ進まなければならぬ。その極限状態は、私には想像もつかない、筆舌に尽くしがたいものだつたと思います。

また、曾祖父は「自分の墓はいらない。戦友たちを置いてきた自分が墓に入ることはできない。」と、繰り返し語つていたそうです。そこには、生き残った者としての懺悔と、戦争によって尊厳を踏みにじられた仲間たちへの深い思いが込められていたのだと感じます。

高齢になつた曾祖父は、体調のすぐれないある朝、寝巻きをきちんと畳み、自らの足で病院へ向かいました。そして、その午前中に静かに息を引き取りました。最期まで誰の手も借りることなく、凛とした姿を貫いたその生き方に、私は深い尊敬の念を抱いて

います。

また、曾祖父は、五十年以上連れ添つた曾祖母と一度も夫婦喧嘩をしたことがなかつたそうです。自分に厳しく、人には優しかつたと、家族は口をそろえて語ります。周囲への思いやりと自分を律するその生き方の中に、曾祖父は「人としての尊厳」を守り続けていたのかもしれません。

曾祖父の遺志は尊重され、葬儀は丁寧に行われましたが、お墓は建てられず、親の墓にも入らず、お寺に納骨されました。

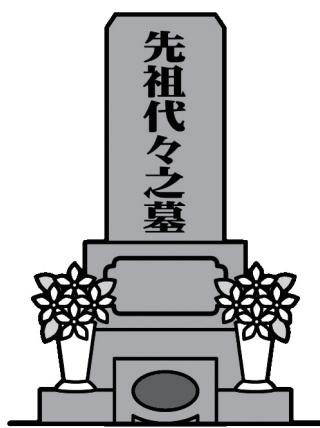
私は、そんな曾祖父の姿を通して、「平和とは何か」を考えるようになりました。平和とは、単に戦争がないことではありません。

現代においても、ウクライナや中東では、曾祖父と同じように徴兵され、望まぬまま紛争に参加させられる人々がいます。また、爆撃により家を失い、日常を過ごす街が、瓦礫と煙に包まれた戦場のような風景へと変っていく。そんな恐ろしい光景が、インターネットやテレビのニュースを通して、私たちの元にも届いてきます。

自分らしく生きることも、大切な場所を守ることも奪われてしまう。そうした姿に、八十年前に曾祖父が体験した悲劇が、今もなお形を変えて繰り返されているのだと痛感しました。

人の命は平等であり、誰もが尊厳をもつて生きる権利があります。私は、それこそが平和の土台だと信じています。

曾祖父の遺志を受けとめ、私も人の命と尊厳を大切にしながら生きていきたい。それが、私にできる平和への一歩だと信じています。



# 「伝えたい」がくれた宝物

中学校一年

宮野紬澄  
みや の ゆ す

私は、五年生の時、突然、友達から無視されるようになり、教室に行けなくなりました。そして、保健室や校長室で過ごす日々が続きました。昨年、「地域を明るくする運動」で、この時の経験を発表する機会をいただき、「地域に安心して過ごせる居場所が必要だ」と訴えました。地域とつながれる場があれば、「孤独感から解放される」と思つたからです。

今回伝えたいのは、その続きです。その後、どう前を向けるようになつたのか。過去と向き合うことで見えてきた私の思いです。

いじめを受けた心の傷は、簡単には消えませんでした。六年生の秋、通級に通い始めました。教室では気持ちを伝えられず、モヤモヤすること多かつた私も、通級では笑顔になれました。自分を責めたり、比べたりする必要がなかつたからです。そのうち、教室にいる時間が増え、話ができる友達もできました。三学期には、校長室や保健室に行かず教室で過ごせるようになりました。私にとって、それはとても大きな成長でした。中学生になつた今、私は、楽しく学校へ通っています。中学校でも通級に通い、コミュニケーションが苦手な自分を少しづつ変えようと努力しています。気持ちをうまく言葉

にする練習、語彙力を高める練習などを通して、成長を実感しています。

教室に居場所がないと思っていた頃の私は、クラスのみんなが「敵」だと思つていました。今振り返ると、自分から心を閉ざしていたのかもしれません。だからといつて、いじめが許されることは絶対にありません。

いじめから立ち直るために大切だと思ったこと。「自分の気持ちを伝える力」を身につけること。そして、「気持ちを相手にぶつける強さ」を持つこと。それが、私のたどりついた答えです。

もし私と同じように悩んでいる人がいたら、まずは、「話していいんだ」と思つてほしいです。言葉にするだけで、心は少し軽くなります。苦しかった時、母にこう言われました。「無理にみんなと仲良くしなくていい。一人でも友達がいれば十分楽しいよ。」その言葉に私は救われました。

最初にも述べましたが、私は、地域に安心して過ごせる居場所が必要だと訴えました。今もそう思っています。それに加え、「自分の気持ちを表現する力を育てる場」が必要だと考えています。ソーシャルスキルトレーニングやカウンセリングなど、コミュニケーションが苦手な人が自分を変えるきっかけになる場所が広がってほしいです。

今つらい思いをしている人達が、「自分の居場所」を見つけられるように。そして、少しづつでいいから、「自分の気持ちを伝える力」を育てていけるように。私はこれらも、自分の声でそれを伝えていきたいです。

# 本当の強さ

中学校一年

藤澤 琉偉  
ふじ さわ るい

ぼくがうまれて六ヶ月の頃、ママの弟であるおじさんが、仕事中の事故で大けがをしました。その日から、おじさんは車椅子での生活になりました。小さい頃のぼくにとつては、そんなおじさんが「当たり前」だと思つていました。

車椅子に乗ついていて、笑つていて、よくふざけてくれて、おもしろくて優しい人。でも、大きくなるにつれて、事故のことや歩けなくなつた理由を知り、改めて大変なことがあつたんだと思うようになりました。

けれど、おじさんはいつも前向きです。悩んでいても笑いにかえる力があります。

「悩んでいる時間がもつたいない」と笑つて、キャッシングカーを自分で改造して運転したり、海外に行つてゾウに乗つたり、車椅子を乗せながらバイクに乗つたりしています。おじさんのそういう姿をみていると、「できないから終わり」じゃなくて「どうすればできるか」を考え、人生をめいっぱい楽しんでいるその姿は、ぼくにとつてとてもかつこよくて、尊敬できる生き方です。

本当に大切なのは、みた目や状態だけでその人の可能性を決めつけてはいけない。その人がどう生きているか、どんな思いで前に進んでいるかだと思います。

ぼくには将来の夢があります。それは、サッカーをがんばることです。正直、うまくいかない日もあります。悔しくてにげ出したくなることもあります。でも、そんなとき、ぼくは、おじさんのこと思い出します。そんなおじさんを思い出すと「できるかどうかじゃない。やりたいなら、やればいい」と自分に言い聞かせたくなります。人の強さは体だけじゃなくて、心の中にあるんだとおじさんを見て、ぼくはそう信じるようになります。

ぼくはこれからもサッカーをあきらめず、挑戦しつづけたいです。そして、いつか自分も、誰かに「勇気をくれる存在」になれたらいなと思います。



# 男、女の前に、わたし、あなた

中学校一年

岡山寧以  
おかやまねい

選挙の時に配られた、ある政党のチラシにイラストが描いてあつた。それは、女性はエプロンを着て家事や子育てをして、男性はスーツや作業着を着て仕事に行くというイラストだつた。私はすごく疑問に思つた。どうして、女性は男性と同じように仕事をしていないのか。別に男性が家事をしていてもいいし、女性が仕事をしていてもいいのではないかと。

私の家族は、父も母も家事をするし、仕事に行く。それに、父も母も子育てをしている。それは、私が生まれたばかりの赤ちゃんの頃からやつているごく当たり前のことだつた。生活していくための全てのことを、どちらか一方しかやらないということはなかつた。私はそういう環境で育つたから、性別によって役割を分けることにとても違和感を覚える。このことに気づいた日から私は、日常生活での価値観のおしつけについて、注意して生活をしてみた。例えば、「お祭りの人手を集めていたチラシに、「大きいものを運ぶのでできれば男手がほしいです。」と書いてあつた。確かに、骨格的に生物的に男性のほうが筋肉があるが、力の弱い男性もいるし、力がある女性もいる。「男手」ではなく、「力に自信がある方」と表すほうが良い。また、病院の仕事のイラストでは、医

者には男性が、看護師には女性が多く描かれていた。しかも、そういうイラストが多いからなのか、確かに私の通っている病院には男性の看護師はいない。まさに、価値観のおしつけが現実になっていた。

これらのことから、社会が、人々の性別で役割を分けている、ということに気づいた。そんな社会に今生きている私は、何ができるのだろうか。ふと小六の頃の男子の友人のことを思い出した。彼は女子から、男なんだから荷物を持つてと言われた時、「そんなん関係ないやろ。」

と毅然と反論した。私は女性としての視線で考えていたが、きっと男性にだつて納得のできない価値観のおしつけがあるのだとはつとした。

そうだ、私は、相手の立場を考えながら物事をいろいろな角度から見て、世の中に埋もれている価値観のおしつけに気づき、おかしいと感じたことはおかしいよと伝える人でありたい。その気持ちは決して対立ではなく、話し合い、相互に理解をしあい、様々な価値観を共有したい。これらの理解から、本当の意味での平等へ一步近づけるのだから、と自分に期待している。

# 明日、笑つて過ごすために。

中学校一年

伯井司咲

みなさんは、平和の大切さや戦争のおそろしさについて考えたことはあるだろうか。私は夏休みにバスケットボールの応援のために広島に行つてきた。その試合の場所が原爆ドームにとても近く、私も社会見学のために原爆ドームに行つた。たまたまその日は終戦記念日で、海外の方が大勢きていた。

私はただの観光で来ているだけなのかと思ったが、お母さんが、ここにいる人たちを二度と同じあやまちをおかしてはいけないという意識をもつている人たちだということを教えてくれた。別に、その人たちが戦争を始めた訳じやないし、悪いわけでもないのにそうやって昔のあやまちやおかした罪に向き合う心はとても素敵だしすごいことだと思った。

今の時代の人は気づいている。戦争はまちがっているということに。でも、昔の人たちは、気づいていても声に出することはできなかつた。声に出した場合には「お前はこの国のこと思っていない」と言われ、最悪の場合には命さえも奪われてしまう。

「戦争なんか行きたくない。」たとえ家族がいても、愛する人が待つっていても、そんな事を言える雰囲気ではない。それが、戦争なのである。

戦争は、人のため、国のためにと言えるのだろうか。自分が思ったことも言えないのは、人権があると言えるだろうか。

戦争は正しくないと分かつていても、国のためにからとわざと自分に思い込ませて、少しでも辛さをごまかそうとするかわいそうな人たちを作りたくない。私は一度と、そんな社会にはなつてほしくないし、それは、すべての人が思つていることだと思う。だけど、ウクライナやロシア、他の国も、まだまだ戦争が続いている国は沢山ある。子供でも戦争はダメだと分かつているのに、それを分からず幼稚な心で簡単に戦争を始めては、たくさんの尊い命を奪っている。そんなに戦争がしたいならしたい人だけがすればいい。自分が戦争を始めたくせに自分は行かずに、のんきに温かいご飯を食べられている人を私は許せない。

日本が戦争をやめて、本当によかつたと思う。確かに、「戦争をやめる。」と聞いた時の国民の絶望や悲しみは無くならないけど、やめていなければ今も続いていたかもしれないと思うと、怖くてたまらない。

結局その日は最高の試合を見ることができた。こんな1日を過ごせたのも、戦争がないおかげだと言える。

人の不幸を共に悲しみ、人の幸福を願う大人が一人でも多くその時代にいたのなら、悲しい思いをしないですんだのだろうか。

私は、原爆ドームや資料館はとてもきらいだつた。人が苦しんでいるところや、家族

がいなくなる想像をしたくないからだ。でも、戦争を二度とくり返さないためにも、原爆ドームはとても必要な場所なんだと理解した。戦争はダメだと、してはいけないと後世に伝えるために。

私が、この作文を通してしないといけないことは、伝えること。まだまだ小さい子供は戦争の存在さえも知らない。私も知らなかつた。だから、戦争の出来事を学校や家族から聞いて、トラウマになるくらいしようげきを受けた。そのしようげきのおかげで、「戦争」というワードがとてもおそろしいものだということを知ることができた。何十年、何百年経つても、この出来事は伝えていかなければいけないのだ。

それが、私たちがこれからも笑顔で生きていられるきっかけとなるかもしれないからだ。



# 大切なときに大事なこと

中学校一年

中 なか  
村 むら  
裕 ゆ  
希 き

3年前、祖母は突然足に力が入らなくなり、自分で歩く事ができなくなつた。

それまでは、私の習い事や弟の幼稚園の送迎、遊び相手をするなど、ものすごく元気だつたのに、その日から祖母の日常はがらつと変わつてしまつた。それまで必死にしてきた認知症の祖父の事、家事はもちろん、日常生活すべてが自分でできなくなつてしまつたのだ。たくさんの病院を回つて入院を繰り返し、難病だと分かつたのが一年後だつた。

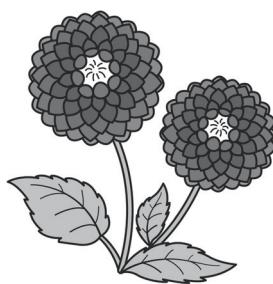
急に始まつた介護の必要な生活に、祖母、祖父はもちろん、私の母も途方に暮れていった。介護認定を申請しても時間がかかり、その間介護が受けられなかつたり、認定されからも、制度上のきまりがあり、結局は母の負担が増え、母も祖母も、変化が苦手な祖父も、何とか一日一日過ごしているといつたギリギリな感じで、全然幸せではなさそうだつた。でも良い環境をと考え、いくつも探して祖母も施設に入つた。

その後相変わらず祖母も祖父も認知症は進む一方だつた。でも母が選び抜いたその施設では、できるだけその人らしく、という事を大事にしてくれ、施設の方の温かい声かけが、介護を受ける祖母だけでなく、母や私たちの暗くなつた気持ちをすごく軽くして

くれたように思う。

高齢化社会になり、介護はみんなが避けて通れない大きな問題の一つだと思う。そのため色々な制度が見直されたり、お金が使われたりしているが、やはり一番は、人の心なんだなと思う。本当に介護される人や、その家族の気持ちになつて考えて行動できているか、という事が何より大事なように感じた。

私は今はまだあまり人を励ましたりするのは得意ではないけど、人の気持ちを考えて行動する事だけは必ずやつていきたいと思う。



# ありのままの好きに胸を張つて

中学校二年

藤本菜月

私は小さい頃からかつこいいものが大好きで、乗り物や機械、青や黒。これらを好きだと言うと「男の子みたい」や「もつと女の子らしいものは?」なんてことをよく言われる。なんで好きなものを好きと言つてるだけなのに「女の子」という枠に收まらないといけないんだろう。ずっと疑問だつた。

私は可愛い人が大好きだつた。好きになる男の子はみんな可愛いと思つた人だつた。あるとき、友達と恋愛の話をしていたとき、好きなタイプの話になつた。私は「可愛い人が好き。」と言つとみんなは笑つた。おかしいことなのかな。私にはわからなかつた。中学に入つて、好きな人が出来た。女の子だつた。それが恋愛感情を意味するのか、友情なのか自分でも正直曖昧だつた。だけど確かに私はその子に對して他の子とは違う「特別な感情」を抱いていた。だから、私はその子に確かめたかつた。冗談つぽく言つたのが悪かつたのだろうか。「きも。」この言葉が本心かは分からぬけれどその時から私は一度と女の子を好きということを言わないようにしようと思つた。人に話しちゃダメだと思つた。だつて嫌われるのが嫌だつたから。周りに変な目で見られるのが怖かつたから。今だつてこの文章を讀んでいる人にどう思われるか考えただけで怖い。

じゃあどうしてこんな文章を書いたのか。怖いなら、みんなの言う「普通」のまま過ごせば良かつたんじやないか。そうだと思う。でも、私は誰かに話したかった。この先、ありのままを受け入れてもらいたいから。そんなことを考えていた矢先、学校でジェンダーレスやLGBTQの話をしてもらうことがあった。世間に知つてもらつたり、理解してもらえるよう、取り組んでいる人がいると知つた。すごく素敵だと思った。それと同時に、私は周りばかり気にして、自分の気持ちを誰にも言えていないと気がついた。そこから色々調べたり、考えたりするようになった。すると私はLGBTQで言う、BのバイセクシャルとQのクエスチヨニング、クイアに当てはまつていた。私は両性愛者で男女のどちらも好きだということ。また、自分の性別が分からなく、それが良いと思うこともあれば、自分の性別を探したくなるときがあるということ。これが当てはまっていた。そして、私と同じ思いをしている人も沢山いると知つた。私はこのことをもつと沢山の人に知つて欲しいと思った。周りの目は怖い。けど、話せば理解してくれる人、共感してくれる人だつて沢山いると思う。

そうして、このLGBTQがもつと広がれば、いつか男、女といった「性別の枠」に縛られずに生きられるようになるだろう。ありのままの自分、好きなものを好きと胸を張つて言える世の中に変えていけるだろう。

# 知は力なり

中学校二年

かな  
おか  
な  
ぎ

728g。それが僕の出生体重だ。一般的な出生体重は約3キログラムなので、その小ささはなかなかの規格外だった。今ではすっかり健康だが当時は肺が弱かつたので、在宅酸素療法といって、鼻にチューブをつけて、酸素を流す状態で退院した。最初の頃は、外出する時も酸素ボンベとセットでなければならなかつた。外出したときに周りから「かわいそうな病気の赤ちゃん」という目で見られるのが辛かつたと母親から聞いた。そこで僕は考えた。僕はかわいそうな赤ちゃんだつたのだろうか。

一般的に、赤ちゃんを見ると人はかわいいと思うだろう。「かわいい」と声をかける人もいるかもしれない。でもその赤ちゃんが一目見てわかるレベルで障害をもつていそうだつたときも、同じように行動するだろうか。見て見ぬふりをしたり、声をかけにくくなつたりすると思う。それが実際僕に起こつていたことなのだろう。

そこでまた、僕は考えた。障害をもつていることはかわいそうなことなのだろうか。障害つて何なのだろう。

障害の医療モデルという考え方がある。障害により生じた障壁を、個人が治療によつて社会に適応していくという考え方だ。対して社会モデルとは、障壁が個人の心身の問

題ではなく、物理的・人的環境など社会のあり方により生み出されているという考え方だ。医療モデルが以前は主流だつたと知り、僕はかなり驚いた。

障害のある人は、何か特別な人なわけではない。偶然そだつたということで、自分もそだつたかもしれない、今後そだなるかもしれない、誰にでもありうる状況だ。それなのに、何かに困っている人たちが、個人の努力でもつと頑張らなければならぬ環境には問題がある。僕はやはり、障害のある人もない人も同じ「人」だと考えてきたし、これからもそう考へると思う。

僕の知り合いに聴覚障害者と健聴者のグループがある。そこで、手話や「バリアクラッシュ」について話を聞いたことがある。「バリアフリー」とはバリアがない状態のことだが、バリアクラッシュとは、実際にバリアを壊してバリアフリーを積極的に実現させる取り組みのことだそうだ。話を聞いて思ったのは、バリアクラッシュもバリアフリーもバリアがなかつたら生まれなかつた概念ということだ。

また、「心のバリアフリー」という言葉もある。それは、障害のある人もない人も関係なく、誰もが理解を深めあい支えあうということだ。

フランス・ベーコンの「知は力なり」という言葉がある。知識をもつことが、物事を成し遂げるための力となるという意味だ。知らないものは怖いが、知つて理解を深めると怖くなくなる。これは、障害がある人たちに關しても言えることだろう。つまり、僕たち一人一人が障害について知り、障害がある人のおかれただけの状況を知り、理解を深め

ることによつて、バリアをなくすことにつながるはずだ。だから僕は、人権や社会問題などを、これからも知り続けたい。



# 介護の現実とすれ違う家族

中学校三年

森 もり  
優 ゆう  
季 き

わたしの祖父が足を悪くして、ある介護施設に入っていた時の話です。わたしと母で祖父に会いに行きました。するとたまたま昼食の時間と重なつてしまつたので食堂の外で終わるのを待つことにしたのですが、それは学校の給食のような樂しいうるさきではなく、その時まだ幼かつたわたしには恐怖すら感じてしまううるさきだつたのです。耳の遠くなつてしまつたおばあちゃんに介護士さんがご飯を食べさせる為、大きな声で話しかけていたのですがその光景があちこちで見られて何ものおじいちゃんおばあちゃんたちが、何度も何度も同じ言葉をかけられているのでわたしには可哀想に見えてしまつたのです。食べている最中に寝てしまつ方もいて介護士さんが寝たらダメと更に大きな声を出しました。まるでわたしが怒られている気分になつて母に帰ろうと言つたら、

「食べさせるって大変やねんで」

と言つて誤飲で亡くなつたりすることもあると教えてくれましたが、ずっと心に嫌な気持ちが残つていました。そして何日かして祖父が食事を自分の部屋で食べることにしたと聞きました。祖父もあの声が嫌だつたそうです。

そしてもう一つ、足を悪くした祖父はリハビリに励んでいましたがトイレへの介助が大変だという理由でオムツを勧められたそうです。結局その事をきっかけに介護施設を変えたのですが、わたしがそのオムツのことを聞いたのはつい最近です。

人権について考えるようになつたとき、いつもこの施設を思い出します。ここが人権侵害をしたと言えるかは分からぬけど、人権の尊重って結局は受けた側の感じ方なんじやないかと思います。わたしはあの介護施設について祖父や他の方々にもう少し人として接して欲しかったと 思います。でも施設の人はきっと入居している人たちをちゃんと人として接してくれてるんだと思ひます。そういう気持ちのすれ違いが大きな問題になつていくのかなつて考えたとき、やっぱり思つたことは相手に伝えるつて大事だと思いました。

### 人権の尊重とは！

お互いに想いを伝えあい、その上でお互いに配慮しあうことで成立する。

# 『人類は助け合い』

成人（中学校夜間学級三年）

私は田舎のとある病院で生まれました。祖母の話では、私が生まれた後に母が急にいなくなり、病院に置き去りにされたそうです。

3歳の時に祖母が電話で母に、「なぜ迎えに来ないのか。」と大声で怒り出しました。「お前は産んだ子を捨てるのか。」と電話での話を聞いて、自分は捨てられたのだと思いました。

私は祖父と祖母に育てられて三人で暮らしていました。

私は、小学校の時一年生から四年生まで授業に出ていないので、勉強ができず、学校のことが何もわからずに悩みました。

そんな中で一時間目の授業が始まるとき、急に頭とお腹が痛くなり、保健室で夕方まで寝ていることがありました。  
一人で家に帰る途中で、朝鮮から来たおじいちゃんが「家にごはんがあるから食べや。」と声をかけてくれました。

小学校から帰るたびに毎回ごはんをごちそうしてくれて、アリランの歌を毎日のように聞かせてくれました。

そのおじいちゃんは一人暮らしでしたが、私を孫のようにかわいがつてくれました。

中学生のころ、学校は生徒同士の殴り合いのけんかで何十人もけがをしたり、お金や物を盗んだりなどの事件が毎日ありました。警察が学校に来るたびに授業になりませんでした。私の中学校生活は、家庭環境が悪く、問題がありました。そのせいで勉強が中途半端になり、何もわからず、人に聞くこともできないまま中学校を卒業しました。

先生方には道徳を教える時間もつと大切にすることを強くお願いします。傷ついている人や、悩みがあつても言葉が話せない人もいます。よろしくお願ひします。

2023年の2月、知人が「殿馬場夜間中学校があるよ。」と私に教えてくれました。「今さら学校に行つてもな。」と悩みながら、知人と私は学校に見学に行きました。副校長先生と面談をしたとき、「この学校になぜ入りたいのですか？」ときかれたので、「改めて一から勉強したいです。」と答えました。

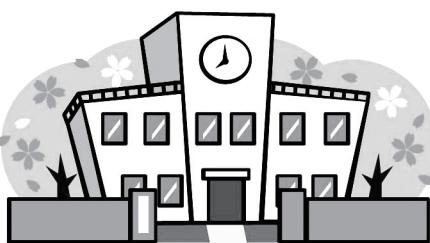
この学校に入つて、国籍や年齢も違이があることに驚きました。あいさつから始めて、授業中に色々な話をすることができるようになつたときはとてもうれしいです。

最近は相手の顔を見て、困っているということが分かるようになりました。困つている時にはお互いで助け合うこともしていきたいです。

私はこれまで人と話す機会があまりありませんでした。

人の悩みや困りごとの相談の話があつても聞き役に回ることが多く、自分のことを伝えることはありませんでした。相手から一方的に暴力を振られ、顔や体が傷だらけにな

ることもありました。私は人間扱いされずに一人で生きてきました。自分の話をする嫌な顔をされ、「自分勝手なやつだ。」「わがままだ。」と批判され、蔑まれてきた人生です。この学校に来て、日本語が話せない人や、漢字や英語がわからない人たちが一生懸命に勉強しています。それを見て、私も勉強しながら、みんなと協力していきたいです。これからも助け合いながら、楽しく過ごしていこうと思います。



# 言葉の重みについて

高校二年 田仲咲来

当たり前にある「言葉」について考えたことはありますか?何気ない一言で、人は良くも悪くも変わってしまうと思うのです。

私は、さらっと言われた「変」という一言で変わりました。「自分で変なんだ」と思い込み、会う人みんなにそう思われていると感じるようになりました。他人の何気ない一言でこんなにも影響力があるのだと、人と話すことが怖くなりました。今では、人のいる空間に居るだけで緊張して、息苦しくなります。例え家族であっても、なんだかありのままでいることができず、疲れてしまいます。周りはそんなに貴方を見てないとか、誰も気にしていないとか、そんな風に言われてそう思おうとしても変われずにいます。きっともつと楽に生きられるはずなのに、どうしても胸の奥にあるモヤモヤが消えません。「変」と言つてきたあの子を恨んでいる訳でも、誰かに「変じやない」と言われたい訳でもなく、自分でも自分がよく分かりません。

これまでに「変」という言葉よりも素敵なお言葉を貰つたことだつてあります。「ありがとう」「大好き」「応援してる」など。こんなにも優しくて温かい言葉で溢れているのに、どうして「変」という二文字に左右されているのだろう。どの言葉も同じ「言葉」

として受け取つてゐるのに、どうして残り方が違うのだろう。きっと「言葉」は思つて  
いる何倍も重いものなのだと思います。何気ないその言葉が、誰かにとつては鋭い言葉  
であつたり、相手を思つた発言が空回りしてしまつたり。色んな人がいる中で誰も傷つ  
かないなど不可能で、みんな傷つき傷つけているのだと思います。一度傷ついたら元に  
は戻せぬ、その傷を上手く隠したり見て見ぬふりをするしかないです。それがまた、自  
分自身を苦しめたり誰かを悲しませることになつたりして、傷は増えるばかりになりま  
す。それでも、嬉しいことや楽しいことを少しでも見つけ出して必死に生きるしかない  
のだろうと思います。「言葉」のない世界なんて想像もつきません。伝えたいたいことを伝  
えられないのは苦しいし、「言葉」がなければ今のように過ごせないです。今だつてこ  
うして「言葉」を使って自分の思いを文章にしてゐるし、なくてはならないものです。  
そのため私は、傷つく言葉が存在する分、幸せに繋がる言葉がそれ以上に存在すると信  
じていきたいです。そして、治らない傷があつたとしても、いつ失うか分からぬ今を  
全力で生きたいです。簡単に使えてしまう「言葉」だからこそ、大切にしようと思います。  
これが私の言葉です。

# インターネットといじめの関係

高校二年

町口彩華まちぐちいろは

私はまず皆さんに問いたい、人に悪口を言つたり、全員で無視したりといふいじめ、皆さんはいいと思いますか？勿論、いいと思うなんて言う人はいないだろう。人が嫌がること、人が悲しむことはしない、当たり前のことである。しかし、現代においてその意識は、とある場所において薄れつつあるのである。

その場所とは、インターネットである。普段からたくさん的人が使つていてインターネット。なぜインターネットでそのようなことが起きているのか。理由は簡単、匿名だからである。つまり自分が直接悪口を言うよりも、匿名にすることによって、あまり罪悪感を感じないのである。

実は私も過去にインターネット上に悪口を書かれたことがある。意見の食い違いによる小さいいざこざだったのだが、解決したにもかかわらず、Xやインスタグラムにあいつ嫌いや、ウザイなど散々な書かれようだった。その時の私はもうスマホを見ることすら恐ろしく、とても辛い思いをした。ニュースでも見たように、ネットで悪口を書かれ、自殺してしまった人々も、こんなに辛かったのかと痛感した。その後、悪口を書いていた本人と直接話す機会があつたのだが、何故そんなことを書いたのか聞いてみると、彼

女の言葉に私は言葉を失つた。それは、「本人は見ていないからいいと思った」「自分の名前を使つていなければ分からないとと思った」「悪口なんて、私以外にも書いてる人はいるから別にいいと思った」などということだつた。悪びれもしない彼女の姿に悪口を書かれたという悲しみよりも、なんて自分勝手で無責任なのだろうと呆れてしまつた。きっと私じゃなくとも誰もがそう思うだろう。

私以外にも今たくさん人の悪口が蔓延してしまつて いるインターネット。匿名だからといって何を書いてもいいわけではない。相手には伝わらないだろう、分からぬだろうと思つても、必ず相手には伝わる。軽率な一言がたくさんの人を傷つける。インターネットは人の人権を傷つける道具ではない。言葉だけでは、自分は関係ないよう に聞こえてしまうが、もう一度自身の行動を見直してみてはどうだろうか。



# 「あたたかいね」

高校三年

田 中 心 咲  
たなかみさき

日曜日の午後。ずっと寂しい時間だつた。小学校で友達と先生との間に距離を感じ、まるでそこに居場所がないかのように感じていた。だから日曜日の午後が嫌いで、明日からの学校を思うと苦しかつた。

毎週日曜日、教会に行くのが我が家の決まりだつた。両親が他の大人と話す間、私は一人でいることが多かつた。そんなある日、いつものように一人でいる私に、そつとおばあさんが近づいてきた。「あたたかいね」。突然のことにも固まつてしまつた。

それから、どんなに寒い日でも雨の日でもおばあさんは教会で会うたび必ず「あたたかいね」と話しかけてきた。その言葉の意味が当時の私には分からなかつた。「何があたたかいの」。いつも不思議に思つていた。その一言からいつも会話が始まつた。猫や道で見つけた花の話。日常の話だつたけれど、私には心地よかつた。

他の大人たちが学校や友達のことについてくる中、おばあさんだけは一度も学校の話をしてこなかつた。学校のことを聞かれるたびに、いつもうつむいていた私を、おばあさんは見てくれていたのだろう。それが何よりも嬉しかつた。今思えば、教会でのおばあさんとの時間が私にとっての「居場所」だつた。

中学生になつた私は、部活動などで忙しくなり、教会に行く機会が減つた。そのため、しばらくおばあさんと会つていなかつた。

高校生になり、母からおばあさんが亡くなつたと聞いた。不思議なことに、大きなショックはなかつた。そして、あの「あたたかいね」という言葉を思い出した。その意味は、今でもはつきりとは分からぬ。それでもあの言葉がくれた居場所とあたたかさは、必ずしも私の心に残つてゐる。きっとあの言葉は、あなたの心にはいつでも居場所があるという、おばあさんからの短いメッセージだつたのだろう。人の心には、どんなに辛くて寂しい日でも、あたたかくなれる居場所がきっとあると。

日曜日の午後、あるいは明日が嫌だと感じる日の前日。あのころの私のように苦しんでいる人たちに、おばあさんがくれたあたたかさが届いてほしい。きっと、あたたかくなれる「居場所」はあるはずだ。それは、だれかの優しい言葉かもしれないし、何気ない日常の景色のなかに見つけられるのかもしれない。誰もが「あたたかいね」を感じられる社会になつていけばいいなと思う。誰にとつても、そんな時間がいつかあたたかい「居場所」になるよう願つてゐる。

# ウクライナ情勢から考える平和と人権

成人 末宗啓太

2022年の冬、ロシアによるウクライナ侵攻が始まった時、私は学生で、ニュースを見てもどこか現実感がなかつた。「遠い国でまた戦争が始まつたのか」と他人事のようを感じていた。

それから数年が経ち、社会人3年目の冬に仕事の関係でウクライナの隣国であるポーランドに出張する機会があつた。その際、仕事内外でウクライナの方々と交流することができた。最初は仕事上の会話ばかりだつたが、徐々に打ち解けてくると彼らは自國での体験を話してくれるようになつた。「戦争が始まつてすぐ戦地に行つた。そこで足を撃たれた」「自國を守るために自宅でドローンの部品を作つている」「明日の朝、自分が生きているか分からぬ」。彼らの中には20代前半と私よりも年下の方もおり、返す言葉が見つからなかつた。日本で平和に暮らしている自分とは違い、彼らは常に命の危機と隣り合わせにいる。そのあまりの違ひに、戦争は起きているのだということを痛感させられた。

彼らは日々、命の不安と向き合いながらも、業務中は笑顔を見せてくれていた。隙間時間には家族とビデオ通話ををしてお互いの安否確認を行つており、その光景は胸に迫る

ものがあつた。戦争は人の命を奪い、安心して生活することができる環境を奪つてしまふ。そしてそれが、今も続いているという事実を、私はようやく自分事として受け止めることができた。この経験を通して、人権とは何かを改めて考えさせられた。人権とは、法律だけで守られるものではない。安心して眠れること、自由に生きられること、大切な人と穏やかに暮らすこと。そんな日常こそが、人としての権利なのだと思った。ウクライナの方々は、自國のために何ができるかを考えており、決して希望を捨てていなかつた。その姿を見て、私は「自分には何ができるのだろう」と考えるようになった。

帰国後、私はウクライナ情勢について積極的に情報を追い、ニュースにも関心を持つようになつた。職場や身近な人に、少しでも「戦争」が遠い話ではないと感じてもらえるように、ウクライナの方々の体験談を伝えるようにしている。ウクライナの方々と出会い、彼らの言葉に触れた経験を私は一生忘れるとはないだろう。戦争は人の命を奪い、安心して生活できる環境を奪う。平和と人権は、誰かが与えてくれるものではなく、私たち一人ひとりが考え、守っていくべきものだと考える。これからも平和と人権の大切さを彼らの言葉と共に語っていきたい。

# 違つても、同じ

成 人 潘 ばん 偉 い 剛 ごう

日本で生活して一年半になります。日本での日々の生活の中で、便利なことや安全であることをとても感じています。これまでにたくさん日本人に助けてもらいました。日本語の先生、不動産屋の社員、年金事務所の職員。みんなはとても親切ですが、時々小さな「かべ」のようなものを感じことがあります。

たとえば、銀行の口座を申し込んだ時、日本語が上手じやないので、はつきり断られました。家を買った時、仲介人に自分の口座の金額を見せて欲しいと言わされました。その時、「やっぱり自分は少し特別な人。」と感じました。「私は日本人と違う。」と感じました。そのとき、SNSで「外国人は私たちと違う」みたいなことを言つてる日本人を思い出しました。たしかに、日本で生活する外国人には、いろいろな「違い」があります。食べ物の好みや、靴を脱ぐ文化や、お風呂の入り方など。最初、町の静けさに驚きました。でも、今は慣れました。今ではこの静かなルールを「いいな」と思うようになりました。日本に来たばかりの外国人は、違うところに少しづつ慣れていく必要があります。でも、一部の外国人が日本のルールを守らないこともあります。こんな悪い例は外国人は「違う」と思わせてしまします。悪い意味の「違う」です。

しかし、悪い例は外国人だけではありません。人によつて行動が違うだけです。外国人だからといって、すべての人が同じではありません。大部分はいい人です。中には悪い人もいます。それは日本人も同じです。

文化や習慣は違つても、心は同じです。家族を大切にしたい。静かに生活したい。人と仲良くしたい。こう思う気持ちは誰でも持つています。

これからは「違つても、同じ」という気持ちが広がつて欲しいです。外国人も、日本人も、お互いに助けあつて、気持ち良く生活できる社会になつて欲しいと思います。



# 『女性だから』の一言が残した傷

成人 川邊 ひかる  
かわ べ

ある日の会議のあと、四十年代くらいの上司がこう言いました。

『女性だから褒められやすいの、うらやましいな』

その一言を聞いた瞬間、胸の奥にざらつくような違和感が残りました。

本当に「女性だから」なのか。性別によって評価が変わるのか、疑問に思つたのです。あの言葉は今でも、私の心に深く残っています。確かに、男性ばかりの職場で私が唯一の女性でした。どれだけ目立たないよう努めても、「女性である」というだけで注目を集めてしまう現実があつたのです。そんな中でも、私は、必死に努力し、成果を出していたつもりでした。性別によって評価の見方を歪められたことが、本当に悔しく、やりきれない思いが残りました。

性別によって機会や評価が左右される現実は、制度の改正などで少しずつ改善されています。それでも、人の意識はそう簡単には変わりません。社会に根強く残る偏った価値観を解消することは、今も大きな課題だと感じています。

私自身も、無意識のうちにその偏った価値観を受け入れていたことに気づかされました。あの出来事をきっかけに、「男性ばかりの職場で働く以上、誰よりも頑張らなければ

ば認めてもらえない」と思い込むようになつたのです。努力が本当に正当に評価されるのかという不安や、常に誰かの視線を気にしてしまう葛藤は、今も心のどこかに残り続けています。

では、なぜそのような偏った考え方や言葉が生まれるのでしょうか。私が思いつく理由の一つは、「心の余裕のなさ」です。

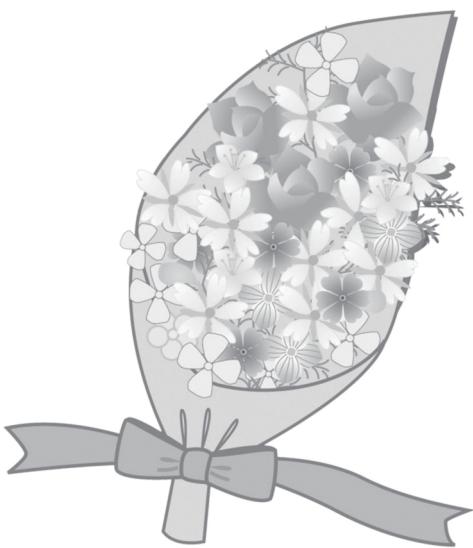
私はかつて自動車メーカーでエンジニアとして働いていました。そこでは常に納期に追われ、開発スケジュールに余裕がなく、ミスが許されない空気が張り詰めしていました。時間的にも心理的にも余裕がなく、誰もが自分の業務に精一杯で、他者への配慮や対話の機会が減つていつたのです。そんな余裕のない環境の中で、上司や同僚は、部下や立場の低い人が褒められていることに対しても、つい嫌味や皮肉を口にしてしまうことがありました。そしてそうした言葉は、多くの場合無意識に発せられ、聞いた人を深く傷つけます。

私は、人が人として尊重される社会は、制度だけでなく、意識と環境の両方が整つて初めて実現すると考えています。だからこそ、心に余裕を持ち、互いを認め合える職場づくりが必要だと考えます。

人権問題を考えるときに最も大切なのは、「自分と違う立場にある人の声に耳を傾けること」だと思います。自分が発した言葉が相手にどう届くのか想像すること。そうした小さな配慮の積み重ねが、人が人として尊重される社会をつくるいくのだと、私

は信じています。

第46回わたしからの人権メッセージ 特選作品



# 高齢者の人権を守る

成人付 賢英しえん いん

私は昨年5月に来日し、大阪で介護の仕事に就きました。当初、私は日本語がほとんど理解できず、困難な時期を過ごしました。それまでに学んだ日本語が全く聞き取れず、理解できなかつたのです。それは大阪弁でした、早口で、しかも聞いたことのない日本語でした。その大阪弁にも慣れてくると、親しみを感じるようになりました。

日本の生活様式や習慣も中国とは大きく異なります。例えば、ゴミの分別は非常に難しかつたです。中国では、ゴミは全て一緒にそのまま捨てていました。日本では、ペットボトルは中を洗って、キヤップやラベルを取り外して分けなければならず、手間がかかり、面倒と感じ大変でした。

そして、仕事でも、人間関係や言葉という問題にたくさん遭遇しました。そんな時、私はどうしていいか、わからなくて、色々悩み考えさせられましたが、改善策は上司や同僚、リーダー達と話すことだと思いました。それから、彼らに相談してみると、親切にアドバイスしてくれ、「言葉が上手でなくても、ちゃんと伝えようとする姿勢が大事だよ。」

と言つてくれました。その時、黙つていないで、一生懸命に話しかけてみるなら理解してもらえると気づきました。

さらに、仕事を通じて高齢者に関する重要な原則に気づくことができました。日本では、両親が認知症や骨折などで介護が必要になつた場合、通常すぐに老人ホームなどの施設に入所することを勧められます。しかし、中国では、介護制度はあまり整つておらず、また、親を尊ぶという観念から、子供が両親を介護するのが当りまえというのが一般的です。このような背景には、それぞれの国の生活習慣や福利厚生制度など違いが大きく影響していると感じています。

高齢者的人権は、単なる概念だけではなく、日常生活の中で、彼らの意志を尊重し、尊厳を守ることがとても大切だと思う。例えば、食事の好みや、入浴の時間、服の好みなど、細かいことでも、彼らの意見をしつかり聞くことです。言葉が通じない時は、ジェスチャーや紙に書いたりして、一生懸命理解しようと努めることで、彼らが自分の意思を尊重してくれると感じてもらえたなら、それは、人権を守る第一歩につながると悟りました。

施設では、時々高齢者が自分の意思を主張できない、または、判断できかねる時もありますが、私は彼らが何が言いたいかを伝えることが使命のように感じてきました。言葉の壁はまだありますが、彼らの目を見て、気持ちを感じ取れるようになつてきました。高齢になつても、人としての尊厳があり、それを守るのが私の使命だと

感じています。

大阪でのこの経験は、高齢者の人権を守るという国境を越えた普遍的な価値だと考えられました。これからも日本語を勉強し協力しあいながら、さらに多くの高齢者の尊厳を守りたいと思います。



## 選考にあたつて

今年度で四十六回目となる「わたしからの人権メッセージ」には今回、四千三百九十六点ものご応募をいただきました。審査員を代表して、メッセージをお寄せいただいた皆様に心からお礼申し上げます。応募作品はいずれも、人権の尊さやお互いの人権を守ることの重要性等について真摯に考えていただいたことが直接に伝わるものばかりでした。

特選作品を選ぶ審査会では、人権テーマについての正しい理解、社会や世界の人権課題の解決に向けて「自分はどうあるべきか」、また「人権が尊重される世の中にしていくことを訴える内容か」、などに焦点をあてて、特選、入選を選考いたしました。

この「わたしからの人権メッセージ」の特長は、小学一年生からご高齢の方まで、それぞれの年齢において、さまざまなテーマの「人権メッセージ」が自分の言葉で書かれている点です。特に、今年度の応募作品には平和をテーマにしたものが多く見られました。今年は戦後八十年で戦争を経験された方が少なくなる中、さまざまな方法で平和学習をし、感じたことが書かれた作文が多くありました。また、堺大空襲について学び、

自分たちの住んでいる堺市でも悲惨な出来事があつたこと知り、自分ごととして今何が出来るか書かれている作品もありました。その他、障がい者と人権をテーマにした作文では、個人の努力ではなく、周りの環境の方が合わせるユニバーサルデザインの考え方について書かれていたり、インターネットやSNSは正しく使わないと危険であり、情報モラル教育の大切さについて書かれていたりと、多岐にわたるテーマのメッセージが見受けられました。

人権問題を考えるうえで重要なことは、「自分ごと」として考え、さらに「一步を踏み出す」ことだと考えます。この特選作品集には、人権課題を主体的に考え、行動することを自分の言葉で書かれた素晴らしい作品が綴られています。

最後に、この冊子を通して、多くの方々が、人権について新たな気づきを得て、さらに行動に変化が生まれたりすることで、結果として人権が尊重される社会の実現につながることを心より願っております。

審査員長 柏原秀和

(堺市人権教育推進協議会副会長)

第46回わたしからの人権メッセージ（2025年度）応募作品テーマ内訳表【応募数】

テーマ	学年	小学校		中学校			高等学校 ／大学	一般	分野別 合計
		低学年	高学年	1年	2年	3年			
同和		0	50		17		0	11	78
女性		0	12		37		1	8	58
障がい者		2	19		304		5	8	338
外国人		1	21		116		2	17	157
子ども		2	39		74		2	21	138
高齢者		1	2		38		0	14	55
性的少数者		1	10		84		1	13	109
平和		316	1295		328		4	15	1958
環境		0	66		107		0	10	183
感染症		0	3		52		0	5	60
犯罪被害者やその家族		0	6		12		0	2	20
インターネット		0	14		184		4	10	212
その他の人権		1	205		769		1	54	1030
年代別応募数		324	1742		2122		20	188	4396

## 【今年度応募作品の傾向について】

- テーマ別の応募数では、平和がテーマの作文が多く、全体の約45%になりました。小中学校で行った平和学習について書かれた作品が多くありました。
- 障がい者がテーマの作文も多く寄せられました。障がいのある方は決して特別ではないことや、困っているときに個人の努力で頑張らなければいけないのではなく、環境の方に問題があるという提言もありました。
- インターネットがテーマの作文では、自分たちにとって身近な存在であるインターネットは、匿名性が高い故、気軽に人を傷つける投稿をしてしまう危険性があること、また、使い方を間違えると、人を死に追いやるということも書かれていました。
- 作文の主張として、それぞれ違った人間であり、全く同じ人間は存在しない。そのため、考え方などが違つてあたり前ということ。違いを批判したり、攻撃したりすることなく、お互いを認め合える社会の実現をめざしたいということが多く書かれていました。

### 御応募いただいた学校その他団体名

\*五年以上連続で応募があった学校や団体には、☆印をつけています。

【小学校】



- 校校校校校校校校校校校校  
学学学学学学学学学学学学  
小学小学小学小 小り小 小  
西東西東西東 小 小 小 東か器  
仙美美美美代田師寺 ひ山 丘鳥  
大登登錦庭野土浜浜原東東東東  
☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

【中学校】

- 校校園校校園校校園校  
学学學學學學學學  
中中中中中中中中  
山芝泉北南莊き野  
香野岡岡箇つ久  
浅上大金金五さ津



### 【高等学校・大学・その他】

- ☆ 堺リベラル高等学校
  - ☆ だいせん聴覚高等支援学校
  - (株)クボタグローバル技術研究所

- ☆ (株) クボタ堺臨海工場  
堺識字・多文化共生学級「つどい」

- 校校校校校校校校校校校校  
小学学学学学学学学学学学学学  
西小小上台台多丘小西小小園学  
置岡泉塚池木国丘下井野晶利  
日平福福楨御美三向八安熊利

- ☆ 校校校校校校校  
学 学 学 学 学 学 学  
中 中 中 中 中 中 中  
中 南 丘 下 中 中 中  
井 泉 国 八 原 下  
平 深 福 三 南 美 八

たくさんのご応募ありがとうございました。



## 「第 46 回わたしからの人権メッセージ」審査員一覧

大町 むら子	堺市人権教育推進協議会 副会長
柏原 秀和	堺市人権教育推進協議会 副会長
高橋 淳子	堺市 人事課 参事
靄原 隆司	堺市人権教育推進協議会 常任幹事
平井 純子	堺市人権教育研究会 事務局
村井 尚行	堺公共職業安定所 管理部長
康原 優子	堺市教育委員会 生徒指導課 主任指導員
渡邊 敬	堺労働基準監督署 副署長

〈敬称略・五十音順〉

## 第 46 回(2025 年度) わたしからの人権メッセージ 特選作品集

2025 年 12 月発行

編集・発行 堺市人権教育推進協議会  
〒590-0078 堺市堺区南瓦町 3 番 1 号  
堺市人権推進課内  
電話 072-221-9280  
FAX 072-228-8070

私たちのまち堺から  
人権文化の火を咲かせよう

この特選作品集は、「第46回わたしからの人権メッセージ」に応募された  
4396点の作品のうち、特選作品を掲載したものです。